

平成30年度研究拠点形成事業  
(A. 先端拠点形成型) 実施計画書

1. 拠点機関

日本側拠点機関:	名古屋大学
(アメリカ)側拠点機関:	コロンビア大学
(フランス)側拠点機関:	コレージュ・ド・フランス
(ドイツ)側拠点機関:	ベルリン自由大学

2. 研究交流課題名

(和文): テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築

(交流分野: 人文学)

(英文): Academic Consortium for Creating the Value of Religious Cultural Heritage through Text Studies.

研究交流課題に係るウェブサイト: <https://www.lit.nagoya-u.ac.jp/cht/>

3. 採択期間

平成29年4月1日 ~ 平成34年3月31日 (2年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関: 名古屋大学

実施組織代表者 (所属部局・職名・氏名): 総長・松尾清一

コーディネーター (所属部局・職名・氏名): 人文学研究科・教授・阿部泰郎

協力機関: 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館

・国立歴史民俗博物館・国際日本文化研究センター、東京大学、南山大学、  
慶應義塾大学、金沢大学、龍谷大学

事務組織: 名古屋大学研究協力部研究支援課・文系事務部

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名: アメリカ

拠点機関: (英文) Columbia University

(和文) コロンビア大学

コーディネーター (所属部局・職名・氏名): (英文) Faculty of East Asia, professor, Haruo SHIRANE

協力機関：(英文) Harvard University  
(和文) ハーバード大学 イェンタン研究所  
経費負担区分：(A型)：パターン1

(2) 国名：フランス

拠点機関：(英文) College de France  
(和文) コレージュ・ド・フランス

コーディネーター(所属部局・職名・氏名)：(英文) Institute of Advanced Japanese Studies, Professor, Jean Noel ROBERT

協力機関：(英文) Paris Diderot University, Strasbourg University, EFEO, INALCO  
(和文) パリ第七大学、ストラスブール大学、極東学院、東洋言語文化学院  
経費負担区分：(A型)：パターン1

(3) 国名：ドイツ

拠点機関：(英文) Free University of Berlin  
(和文) ベルリン自由大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of History, Professor, Jochem KAHL

協力機関：協力機関：(英文) University of Heidelberg, University of Hamburg, Austrian Academy of Science, Strasbourg University

(和文) ハイデルベルク大学、ハンブルク大学、オーストリア・アカデミー、ストラスブール大学／イナルコ

経費負担区分 (A型)：パターン1

## 5. 全期間を通じた研究交流目標

○人類が創出した文化の遺産は、その普遍的価値を等しく認められ、尊重されるべき共通の遺産だが、その頂きに立つ宗教の生み出し、その象徴となる遺産は、過去にも、とりわけ現在の世界の状況において、深刻な危機に瀕している。多様性を認め、異質な文化と共生することを理想とする社会にあって、人文学が果たすべき責務のひとつに、人類の宗教文化の遺産についての普遍的な意義を、その情報を含め、諸研究機関の連携による分野間の学知の総合によって見出し、提言する学術創成が求められる。そのための総合的な研究の蓄積と理念において領導する欧米の中核拠点大学との、国際共同研究が必要とされている。○世界各国の文化機関(博物館・美術館・大学・図書館等の)所蔵分を含めて、各地に伝えられる宗教が生み出した文化遺産に対する総合的なテキスト学による探査と研究を推進する先端的国際研究拠点を、名古屋大学文学研究科の「人類文化遺産テキスト学研究センター」(CHT)に構築する。このCHTでは、日本／アジアの宗教文化遺産のアーカイブス化と探査で挙げた大きな成果を、まずコロンビア大学、コレージュ・ド・フランス、ベルリン自由大学との成果の共有を通じて連携し、中堅・若手研究者の相互交流による広域な大学間および文化機

関間の研究集会や国際ワークショップ開催による“宗教テキスト文化遺産”研究コンソーシアムの活動を立ち上げる。○この国際学術連携を通じて、5年間で、日本を中心に（アジア／ヨーロッパ／中東等を包摂した）世界的な宗教テキスト文化遺産の普遍的価値の認識を共有し、そのアーカイブス化を通じた情報共有と、人文学における宗教テキスト研究が有する画期的な学術上の発展可能性を、最先端の国際共同研究によって提起する。

## 6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

宗教文化遺産学・テキスト学共同体（コンソーシアム）構築の端緒として、コーディネーターである阿部は、相手側拠点機関の各代表の3名と6月及び10月に日本およびパリで共同研究について打合せを行った。コロンビア大のシラネ教授（およびコモ教授）と名古屋で共同研究の課題について検討し、平成30年度末（3月）に「境界」の解釈—文化論というテーマの許に日本の宗教文化遺産をめぐる国際研究集会を行い、その成果を英文論集で出版することで合意したため、研究組織と学術基盤を整えることとなった。その土台として、学習院大学の兵藤教授による盲僧・語り物研究会と協力し、支援することになった。

フランス、コレージュ・ド・フランスのロベール教授と6月に、パリにて既に合意している「論義」をめぐる宗教文化テキスト遺産の共同研究についての国際研究集会について打合せし、10月にコレージュ・ド・フランスにて三日間「論義と宗論の文化史」をめぐる国際研究集会を共同で開催した。更に、次年度初に龍谷大学で論義に関する学会を開催（「日本仏教と論義」）し、これらの成果を元に仏教百科全書『法宝義林』論義篇を編集する目標を設定した。（そのための行程表も作成）

ドイツ、ベルリン大学のヨヘム・カール教授は、周藤教授の招待に応じて10月に来日し、エジプト考古学の国際コロキウム（学術会議）の基調講演を行うと共に、今後の共同研究をめぐる打合せを行った。平成31年度にベルリンにおいてコーディネーター周藤教授と共同して大型国際研究集会を催す予定を確認した。

この他、ドイツ語圏では第三国として、オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所のベルンハルト・シャイド教授と共同国際ワークショップ「文化遺産としてのアーカイブス」を開催（6月）、更に（2018年3月）ハイデルベルグ大学で国際ワークショップ「聖なるテキストのマテリアリティ」（第三回）を開催した。また3月には木俣教授がストラスブール大学を訪問し、シェーレ教授と平成30年9月のセミナー開催について合意した。

研究代表者はフランス語圏では、ストラスブール大学におけるSEJAの国際研究集会で参加報告を行い（平成30年3月）、アメリカでは2018年2月にグローバル展開プログラムによって、ハーバード大学で美術館収蔵の宗教文化遺産の調査を兼ねて、阿部教授・ロブソン教授と平成30年度の共同研究の打合せを行い、2018年6月に名古屋で行われる若手・院生学術交流会と像内納入宗教テキストを巡る国際ワークショップ開催の予定を合意した。

以上、各拠点大学のコーディネーターとそれぞれの共同研究について、具体的な進展のために課題を設定し、平成30年度を中心に各種セミナーの開催予定を決め、成果の発表媒体に至るまで検討・議論を進めた。

また、国外での研究成果報告として、8月にリスボン EAJS 大会において「西行の旅と文芸—時空の超越—」パネルを開催した。

さらに、国内では、南山大学宗教文化研究所と名大 CHT の共同による「第一回 若手日本宗教文化セミナー」が 2018 年 1 月に開催され、5 名の海外若手宗教研究者による研究報告が行われ、報告者同士のつながりも築かれた。更に 5 名の日本側宗教研究ディスカッサント（うち 2 名は名大）が参加し充実した討議が行われた。次年度も同時期に同規模のセミナーを開催予定することで合意した。

## 7. 平成 30 年度研究交流目標

### <研究協力体制の構築>

名大 CHT をハブとする、米仏独三箇国の傑出した人文学拠点大学・研究機関との共同研究を通しての拠点構築のための体制・枠組を明確に立ち上げることが、今年度の重要な課題である。米国コロンビア大とは共同研究の成果発信（英文論文集の編集・刊行）という目標に関する明確な日程表と責任態勢<sup>ロードマップ</sup>を確立する。仏コレージュ・ド・フランスの場合も同様であるが、更に加えて両機関との学術交流協定締結を実現させる。独ベルリン自由大とは、共同研究プロジェクトの立ち上げを次年度にかけて行う。また既に共同研究において先行する米ハーバード大学、仏ストラスブール大学、独ハイデルベルク大／ハンブルク大学等のそれぞれ特色ある研究拠点との交流やセミナー等の成果を拠点との共同研究と有機的に結び付けることが求められる。

更には、国内の研究機関との連携も必須である。前年度内に行った金沢大学、龍谷大学との連携協定の締結、人間文化研究機構の諸機関（日文研・国文研・歴博など）との研究資源などの特色を生かした連携など、名大 CHT がこれら研究協力機関との双方向かつ内外の研究交流協力体制の要となることを最大の目標とする。

### <学術的観点>

当初の計画における、アメリカ／フランス／ドイツ三カ国の人文学におけるテキスト学／文化遺産／宗教学という学術上の理論・方法上の特色と卓越する分野の成果を生かすべく、各国の共同研究の主題（課題）と対象／方法論について特に配慮し、日本側及び名大 CHT の研究資源および学術上の利点を最大限に生かした共同研究の達成について見込まれる成果への貢献及び活用ができるように設定する。

宗教文化遺産について、人類学的な文化理論の枠組<sup>パラダイム</sup>を提案すると共に、社会実践上の価値・意義を創成することを必須とするアメリカ人文学との宗教文化遺産をめぐる共同研究を、「境界の文化論」と像内納入品の宗教文化遺産化としての比較研究の二方向から進め、それぞれの課題における着実な成果を期間内に作成・提出し、その過程における研究連携の実績を人類文化遺産研究の発展的学術成果とする。

理論（テキスト論）研究と思想／文学的水準の研究において卓越するフランス人文学とは、とくに東洋（中国・極東）における重厚な蓄積を誇る学術上の特色を活かした新たな宗教テキスト学の構築が期待される。具体的には、論議と宗論という、仏教のみならず宗教一般に

において普遍性を有する研究対象を通じて、従来の学知を統合しつつ新たな宗教テキストに立脚した文化遺産の理念を提示する。

文化的記憶の提唱、およびアーカイヴス学とその実践、歴史的蓄積において卓越するドイツ人文学において、その最もすぐれた達成を見せる分野であるギリシア・エジプト考古学<sup>(アルケオロジー)</sup>をはじめとして、物質（モノ・マテリアル）とそこに付随する文化性との間の連関を、人類共通の普遍的文化遺産として見出す高次元の文化理論研究へと展開させる。

#### <若手研究者育成>

拠点形成期間中に毎年度一回恒例で確実かつ最優先にて行う予定の南山大学宗教文化研究所における「日本宗教文化セミナー」が、欧米の有力大学からの大学院留学生ないし若手研究者の研究発表・研究交流をへて研究水準の向上に資する重要な機会を提供する。

これ以外にも、本年度に企画されるセミナーの多くには、日本／海外の若手研究者や大学院生が参加し、研究上の実績を上げると共に、各自の博士論文執筆をサポートするための院生によるワークショップを中心とし、又はセミナーの一部に組み込むように配慮する。

加えて、平成 29 年度からスタートした「頭脳循環」プログラムは、その研究教育の対象課題と参加者がグローバル展開プログラムに重なるところだが、欧州の仏・独（ストラスブール、ハイデルベルク）の拠点校を中心に、若手研究者（PD）を派遣し、研究・教育に従事させることを任務としており、本拠点形成と適切に連携すれば、若手育成にとって大きな相乗効果が期待できるだろう。

#### <その他（社会貢献や独自の目的等）>

本拠点形成が主催もしくは共催する国内のセミナー（研究集会・シンポジウム・講演会）は原則的に一般公開されるものであり、また、その一部（コレージュ・フランスでの公開会議など）については、ウェブ上で講演内容を広く発信する工夫を行っている。

また、本拠点形成事業の基盤となる代表者による科研基盤（S）は、最終年度にあたる平成 30 年度に人間文化研究機構の各機関と名大 CHT をハブとして協定を締結し、神奈川県立の歴史博物館および金沢文庫・国学院大学神道博物館と連携した総合テーマ「列島の祈りー日本儀礼テキストの世界」を横断的な主題対象とする展覧会を催行する予定であり、これら主機関の展覧会は、本学術拠点形成事業の共同研究や各種セミナー、ワークショップ等と相互に有機的に連携し活用され、また研究成果の社会発信ともなる。このほか、特にハーバード大学との像内納入品宗教テキストを廻る国際ワークショップでは、東北大学ほかの文化遺産関係諸機関との連携により、国際的スケール（東アジアの中国・韓国・日本）での各国の像内納入品を対象とした宗教文化遺産の研究が国際比較のスケールに世界的に拡大して展開する大きな契機となると思われ、従来の日本の美術史・彫刻史を中心とする像内納入品の調査研究の蓄積と成果が、全く新しい次元で進展する、人文学上でも画期的な機会となることが予期される。

特に共同研究の出発点となった、ハーバード美術館所蔵の聖徳太子二歳像の胎内納入宗教テキストの調査研究（CHT により平成 26 年度から継続して行われている）は、本年度の

交流活動を元に、平成 31 年度にはハーバード美術館で展覧会を催す予定であり、本拠点形成事業がこれに学術上の多大な貢献をなすことが期待されていることを特記しておきたい。

## 8. 平成 30 年度研究交流計画状況

### 8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 31 年度
共同研究課題名	(和文) 境界と越境のテキスト文化遺産 (英文) Texts as Cultural Heritage: Establishing and Crossing Boundaries				
日本側代表者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科、教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1				
相手国側代表者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(英文) Haruo SHIRANE, Columbia University, Faculty of East Asia, professor, professor 2-1				
30年度の 研究交流活動 計画	<p>コロンビア大学のハルオ・シラネ教授により日本文化における境界 border をめぐる文学・宗教・芸能等の文化論的考察（アプローチ）についての共同研究提案を受け、名大 CHT ではこれを“越境”という動態において諸位相のテキストを介在させ、解釈しつつ探究し、かつその総体を文化遺産として把握する志向の許で展開することで発足した。初年度は研究打合せを兼ねて兵藤裕己学習院大学教授の語り物研究会と連携し、またコロンビア大学の研究担当者マイケル・コモ教授を3ヵ月間名大 CHT に特任教授として招へいし、共同研究に従事してセミナーを開催し共通の課題を明確化した。今年度はその合意に基づき5月にシラネ教授による CHT での講演を機会に打ち合わせを行い、適切な研究メンバーを選び、国内での複数回の研究会を経て、平成 31 年 3 月にコロンビア大学での「境界と芸能」を主題とした、シラネ教授をコーディネーターとする国際研究集会に臨んで研究報告を行う。討義を経て英文学術書として編集・公刊予定の共同研究成果報告書に提供し得る論文原稿を執筆する基礎づくりを本年度の目標とする。なお、米国への派遣人数は、代表者を含め 10 名程度を予定している。</p>				
30年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ	<p>上記の「境界の文化論」という基本主題を「境界」という導体的な問題設定と「宗教文化遺産」および「芸能」という具体的な対象化により取り組むべき研究対象を明確化する。この課題にふさわしい研究者を日米両国で選び、数次にわたる研究討義を経て各自の研究課題を深化発展させた上</p>				

れる成果	で、国際研究集会に完成したフルペーパーを報告し、批評と質疑を受け、より高い学術水準での先端研究成果として成稿する。この成果により、日本の宗教文化遺産に関する独自の視点を海外に発信することが期待される。
------	--

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 32 年度
共同研究課題名	(和文) 宗教文化遺産としての論義と宗論テキスト (英文) Texts on Monastic Debates and Disputations as Religious Cultural				
日本側代表者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科、教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1				
相手国側代表者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(英文) Jean Noel ROBERT, College de France, Institute of Advanced Japanese Studies, Professor, 3-1				
30年度の 研究交流活動 計画	日本仏教文化の基盤として古代から近世まで継続した伝統を有する論義は、経典の講説という聖典解釈学の体系として仏教諸宗の数学上の根拠を構築する学説の母胎であった。同時に、宗義を修学する僧侶の修習階梯として成員となるための通貨儀礼の機会としても不可欠なシステムであった。東洋学と仏教学の永い学術研究の蓄積を有し仏語仏教百科全集『法宝義林』論義篇の編集を担うコレージュ・ド・フランスのロベール教授と名大 CHT が参画・協力して、日本仏教学等の研究協力者と論義およびこれと不可分の宗論をめぐる文化史研究を行い、龍谷大学世界仏教文化研究センターと連携して、論義およびそのテキストを宗教文化遺産として普遍的価値を再認識する共同研究を進める。第二年目にあたる本年度は前年度のバリ及び平成 30 年 5 月の龍谷大学での研究集会の成果を踏まえて、論義篇のための基礎稿を執筆する。				
30年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	前年度のバリ・コレージュ・ド・フランスにおける学会において、米国等の研究者を含む、フランス側の研究者の日本仏教における論義の認識や研究上の課題について、日本側参加者が、宗論（諸宗論）を含むより広汎な文化史的意義を提示した成果を踏まえ、龍谷大学世界仏教文化研究センターとの協同により、日本仏教全般の視野の許に、大規模な研究会議と講演会、シンポジウムを開催する。このことにより、改めて論義の仏教学、仏				

	<p>教文化上の日本仏教の展開の上での重要な意義を再認識することが期待される。また、その際にパリでの報告者を含めた新たな若手や中堅の仏教研究者が日本仏教諸領域での論義の果たした役割を発見することにより、そのテキストに関する研究への取り組みが加速され、深化する基礎的な分野での学術上の活性化も期待される。</p>
--	---

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 30 年度	研究終了年度	平成 33 年度
共同研究課題名	<p>(和文)「像内納入宗教文化遺産の比較研究」</p> <p>(英文) Comparative Research on the Objects Inserted within Religious Statues</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	<p>(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 近本謙介・名古屋大学人文学研究科・准教授</p> <p>(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1 CHIKAMOTO Kensuke, Nagoya University, Graduate School of humanities, Associate Professor 1-5</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	<p>(英文) James Robson, Harvard University, Professor 2-7 ABE Ryuichi, Harvard University, Professor 2-5</p>				
30年度の 研究交流活動 計画	<p>これまでハーバード美術館蔵聖徳太子二歳像内納入宗教テキストの調査研究をハーバード大学の阿部龍一教授と美術館のレイチェル・サンダース学芸員と共同で行ってきたが、このたび、ロブソン教授の提案により、中国民間神像の像内納入品の資料集積を礎に韓国の仏像の像内納入品の研究成果との共同研究の成果を受けて、更に日本の仏像胎内納入品は銘文資料など、日本美術史とくに彫刻史、仏像研究が蓄積してきた成果との比較研究と実地見学ワークショップの開催が企画された。名大CHTでは、これを機に、仏教および道教など東アジアの宗教文化の重要な文化遺産として、これら聖像内の像内納入品の総体を宗教テキストとして認識し、それぞれの歴史的・宗教的なコンテキストを踏まえつつ、それらの有する普遍的な意義について共同で探究、考察する共同研究として、本拠点形成の主要な共同研究のひとつに位置付ける。そのため、平成30年6月に来日するロブソン教授をゲストとして（米国からはハーバード大学阿部龍一教授、ハンク・グラスマン教授、フランスからはアロー教授、他に韓国からもゲスト研究者が参加予定）招く。</p>				



	<p>名大および金沢文庫にて、像内納入品を巡る研究会およびワークショップを開催する。日本側は代表者と近本准教授をはじめ、長岡龍作東北大学大学院教授、瀬谷貴之金沢文庫主任学芸員、奥健夫文化庁主任調査官などの参加を得て、日本の仏像彫刻における胎内納入品の研究の現状と課題を講演・報告と共に、その宗教テキスト遺産としての研究の可能性を探る。また、ハーバード美術館所蔵、聖徳太子二歳像内納入テキストの調査研究も次年度に美術館で予定される展覧会に成果を提供すべく進捗させる。</p>
<p>30年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>ハーバード大学のロブソン教授による像内納入品国際研究プロジェクトに協力し、日本の仏教彫刻・美術史研究の胎内納入品に関する研究成果を紹介して、相互に資料や知見を共有し、その宗教文化遺産としての意義や価値を明らかにすることを通じて、より大きな東アジア規模での像内納入品の普遍的な研究課題を発見する画期的な学术交流の機会となることが期待される。これに名大 CHT が、ハーバード美術館蔵聖徳太子二歳像の像内納入宗教テキストの研究成果を資料化して提供することにより、その一層の深化と研究の発展、ひいては展覧会に向けての資料集作成など学術上の基盤的成果も貢献できる。</p>

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「灌頂の世界」 (英文) JSPS Core-to-Core Program The World of Abhiseka: Consecration Rituals in the Buddhist Cultural Sphere
開催期間	平成30年5月7日～平成30年5月9日(3日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) アメリカ、カリフォルニア、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (英文) USA, University of California, Santa Barbara
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Fabio Rambelli, University of California, Santa Barbara, Professor 2-8

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (アメリカ)		備考
		A.	B.	
日本	A.	8	48	
	B.	1		
(アメリカ)	A.	2	8	
	B.	6		
(イギリス)	A.	0	0	
	B.	1		
合計 <人/人日>	A.	10	56	
	B.	8		

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14(=2人を7日間ずつ計14日間派遣する)のように記載してください。

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場

合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本来は王の即位儀礼であり、仏教のなかで密教の東アジアへの流伝と共にもたらされた灌頂儀礼は、伝授継承の通過儀礼として宗教組織継承の核心を成す儀礼であった。灌頂を共通の主題として、とくに日本の宗教社会文化の形成のなかで古代から中世にかけて灌頂がいかなる文化を形象したか、真言密教に限らず、世俗の諸道・芸能ひいては天皇の即位儀礼をめぐる即位灌頂の伝承に及ぶ諸分野の専門研究者が、米国・日本・チベット・モンゴル等の諸領域の宗教研究者と共同して研究成果を報告、討議することにより、灌頂という宗教文化の結節点やそれが生み出す文化的主題について包括的に論議する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>日本の諸分野（宗教・建築・文学・芸能・歴史等）の専門研究者が一所に集い、これに深い関心を抱く米国の宗教文化／記号学研究者およびアジア諸地域の研究者がこの問題に関わって知見を提供し、互いの研究報告をめぐる自由な討議を通して、「灌頂」という宗教的通過儀礼としての人類的な宗教文化の普遍的儀礼遺産の意義を再確認、発見する。ひいては、宗教儀礼とそれに関わる伝承・諸宗教の生みだした豊かな文化的遺産をテキストの次元で普遍的に位置づけることが可能となるだろう。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>日本側の代表者（名大 CHT・阿部）が、米国側の代表者（UCSB・ランベッリ氏）と前年度からの十分な協議の上、日本側参加者を組織し、本拠点形成により UCSB に代表者以下の研究協力者を派遣する。SB 側はランベッリ教授を責任者とし、同大研究者・院生を中心に、米国・英国の宗教研究者を独自に招聘した研究集会を開催し、拠点形成事業による日本側の研究組織団を受け入れる。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：日本側参加者の旅費（航空券、宿泊費）</p>
	<p>アメリカ側</p>	<p>内容：米国・英国の参加者招聘、研究集会開催経費、エクスカージョン費（会議費）</p>

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 龍谷大学世界仏教文化センター「論義学会」「日本仏教と論義」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University: Rongi Conference The Rongi (monastic disputations) in Japanese Buddhism
開催期間	平成 30 年 5 月 12 日 ~ 平成 30 年 5 月 13 日 (2 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、京都、龍谷大学
	(英文) Japan , Kyoto ,Ryukoku University
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授
	(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1

#### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)		備考
		A.	B.	
日本	A.	15/45		
	B.	90		
フランス	A.	1/5		
	B.	0		
合計 <人/人日>	A.	16/50		
	B.	100		

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14(=2人を7日間ずつ計14日間派遣する)のように記載してください。

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>平成 29 年度 10 月にフランスのコレージュ・ド・フランスにおいて開催された「日本仏教における論義の文化」第一回の研究集会（平成 29 年には、名大で準備研究会議が行われた）を受けて、更に日本仏教諸宗の論議の伝統や諸宗の学問教理形成史上の意義について、各分野の第一線の専門研究者による研究集会（初日は、『法宝義林』論義篇編集のための研究会議と若手研究者による研究報告と談論会、二日目は J.N.ロベール教授による基調講演と講演会・シンポジウム）を開催する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>前年度のパリ研究会の成果に加え、その際に参加できなかった報告者による講演を含む、全研究協力者の参加及びより応沓な仏教研究者を集め、共同研究 R-2 の研究者の参加により、論義の宗教文化遺産としての多面的な意義とそのテキスト学上の普遍価値を学界として共有し、龍谷大との協力関係の許に、社会に発信することが期待される。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>龍谷大学世界仏教研究センター（DARC）が主催する「日本仏教における論義」学会に名大 CHT が拠点研究形成事業として共催する形態をとる。全体の運営・会場・懇親会等は全て龍谷大側が担当し、ロベール教授も招聘する。</p> <p>名大 CHT は、本共同研究の国内研究協力者を本セミナーに出席・参加させ、またロベール教授が代表者となる初日の“法宝義林”編集会議を主導する。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側 名古屋大学</p>	<p>内容：日本側参加者全員の国内旅費を拠点形成事業で支出（成果発信のための情報コンテンツ作成、その他を CHT により適宜支弁し支援する）。</p>

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 像内納入品の国際ワークショップ
	(英文) JSPS Core-to-Core Program International Workshop on the Object Inserted within Religious Statues
開催期間	平成 30 年 6 月 23 日 ~ 平成 30 年 6 月 24 日 (2 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、横浜、神奈川県立金沢文庫
	(英文) Japan , Yokohama, Kanagawa Prefectural Kanazawa bunko museum
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授
	(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) James Robson, Harvard University, Professor 2-8

#### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)		備考
		A.	B.	
日本	A.	4/ 8		
	B.	8		
アメリカ	A.	2/ 12		
	B.	5		
その他	A.	0/ 0		
	B.	15		
合計 〈人／人日〉	A.	6/ 20		
	B.	28		

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※人／人日は、2／14(=2人を7日間ずつ計14日間派遣する)のように記載してください。

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場

合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>米国拠点校のひとつであるハーバード大学東アジア学部の J.ロブソン教授の提案を受け、同大の阿部教授と代表者との名大／ハーバード大の大学院生研究交流会に合わせて、仏教・神像など宗教的尊像の像内（胎内）に納入される各種の宗教文化の遺産（舍利・五蔵・経典・記録など）についての調査・研究の現状とその研究成果を報告し、情報を共有することにより、宗教文化遺産をめぐる研究の展開と深化を目指す。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>特に中国・韓国・日本の東アジア各国の像内納入物を最先端の成果を相互に提供し、その特質や問題点を比較することにより、聖像の宗教性の核心にあたる納入品の全体を宗教テキストとして普遍的に分節認知を行う。その中でもハーバード大学美術館に所蔵される13世紀鎌倉時代聖徳太子二歳像の納入品に関する名大との共同研究の進展を米国研究者の介在による日・韓の当該分野の専門研究者の成果と結びつけることにより、より大きなスケールで世界的な規模での宗教文化遺産の発見と研究連携の萌芽を生み出すことが期待される。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>米国側のハーバード大学・J.ロブソン教授が組織した米国・韓国の拠点校の研究者が、名大 CHT の阿部、近本を代表として組織する東北大・金沢文庫・東大・文化庁の研究者と、名大および金沢文庫において共同の国際ワークショップ（像内納入品の調査、見学を含む）を三日間にわたり開催する。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：日本側参加者の国内旅費等</p>
	<p>アメリカ側</p>	<p>内容：米国側参加者の外国旅費</p>

整理番号	S-4
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 ハンブルク大学国際宗 教写本学ワークショップ
	(英文) JSPS Core-to-Core Program Hamburg university; International Workshop in the Study of Religious Manuscripts
開催期間	平成 30 年 8 月 21 日 ~ 平成 30 年 8 月 24 日 (4 日間)
開催地(国名、都市名、 会場名)	(和文) ドイツ、ハンブルグ大学
	(英文) Germany, Hamburg, University of Hamburg
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研 究者番号	(和文) 近本謙介・名古屋大学人文学研究科・准教授
	(英文) CHIKAMOTO Kensuke, Nagoya University, Graduate School of humanities, Associate Professor 1-5
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研 究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Jorge Kvendza, University of Hamburg, Professor 4-4

#### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (ドイツ)	備考
日本	A.	6/42	
	B.	0	
(ドイツ)	A.	2/6	
	B.	4	
合計 <人/人日>	A.	8/48	
	B.	4	

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14(=2人を7日間ずつ計14日間派遣する)のように記載してください。

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。



<p>セミナー開催の目的</p>	<p>ドイツにおける人文学学術研究拠点センターオブエクセレンス (COE) (クラスター) のひとつ、ハンブルク大学の国際写本学のマニュスクリプト研究の一翼を担う Y.クベンツァー教授と、名大 CHT の宗教テキスト (宗教文化遺産学の中核研究概念) 学を有機的に連携及び相互の研究を発展させ、テキスト学による宗教文化遺産の世界的かつ普遍的な研究拠点化をはかる。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>国際的な写本研究の一領域としての日本宗教写本の研究を本挙ティン形成の課題である宗教文化遺産のテキスト学的研究の対象として立ち上げる重要な一段階として、双方の中核研究者とこれをささえる中堅・若手の研究者による、集中的な研究展望と問題を共有するための報告、テキスト概念の討議を行う。互いに共通するフィールド対象としての写本という具体的な宗教テキストの歴史的意義や機能の検討を介した研究成果の共有により、文化遺産としての宗教テキストの基盤的次元を明らかにすることができるよう、<sup>アーカイブ化</sup>記録・<sup>レガシー化</sup>記憶の営みの機能、その素材・書写・解読という再解釈行為など日本の専門研究者が共通の土俵に立つて行うことができる画期的な機会である。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>日本側は名大 CHT の協力教員近本准教授が組織する。本拠点形成事業代表をはじめ、仏教・神道・歴史などの各分野の宗教テキスト研究者による研究グループを結成し、ハンブルク大学へ派遣を行い、同大のクベンツァー教授の所属する国際写本学研究センターにおいて、代表による基調講演をはじめ、2 日間の研究会と 2 日間の調査、見学のエクスカージョンを行う。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：日本側研究者の外国旅費を負担</p>
	<p>ドイツ側</p>	<p>内容：研究集会開催経費 (ドイツ側の研究者の招へい費、エクスカージョン経費)、会議費</p>

整理番号	S-5
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 フランス・ストラスブール大学「近代 19～20 世紀の仏と日本ナショナリズムと同一性」研究集会 (英文) JSPS Core-to-Core Program France: Strasbourg University Similitudes between French and Japanese Nationalism in the 19 <sup>th</sup> and 20 <sup>th</sup> centuries
開催期間	平成 30 年 9 月 14 日 ～ 平成 30 年 9 月 21 日 (8 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) フランス、ストラスブール、ストラスブール大学 (英文) France, Strasbourg, Strasbourg University
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Marc Carel Schurr, Strasbourg University, Professor 3-7

#### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (フランス)		備考
		A.	B.	
日本	A.	2/8		
	B.	3		
(フランス)	A.	1/2		
	B.	3		
合計 〈人/人日〉	A.	3/10		
	B.	6		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14 (= 2 人を 7 日間ずつ計 14 日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>フランスにおける拠点形成の一環として、名大と学術交流大学・大学院教育に関する協定締結関係にあるストラスブール大と、名大との文化遺産研究に関わる西欧中世美術研究者のハイデルベルク大との共同研究に加え、より多元複合的な国際共同研究として進展させるために、ストラスブール側から提案された。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>文化遺産という認識が近代に発するものであり、各国の民族的・国民国際的な文化同一性の運動と軌を一にするものであったことを改めて回顧し、目下の分断と対立・排他主義の蔓延するあらたなナショナリズム到事の時代にあって、未来の人類普遍の価値を有する文化遺産の創成と共同性の構築に向けた人文学学術上の提案を試みる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>ストラスブール大学の M.シェーレ教授が組織する研究集会に、名大を中心とする日本側の研究者（木俣教授、阿部に加え、若手名の本主題にふさわしい美術史・文化史の研究者）が、本拠点形成事業により渡航、参加する形態をとる。日本側は名大 CHT が窓口となり、ストラスブール大と名大 CHT の共催の形成とする。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：日本側研究者の外国旅費（交通費、宿泊費、会議費）</p>
	<p>フランス側</p>	<p>内容：研究集会開催経費、フランス側の報告者の招聘費用、宿舎代</p>

整理番号	S-6
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 フランス・エクス・マルセイユ大学「中世日本の世界像 (ヴィジョン・体系) -文化遺産としての世界テキスト」 (英文) JSPS Core-to-Core Program France University Aix-Marseille “The Worldview of Medieval Japan “ (Vision; system); World Texts as Cultural Helitage
開催期間	平成 30 年 11 月 24 日 ~ 平成 30 年 11 月 26 日 (3 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) フランス、プロヴァンス、エクス・マルセイユ大学 (英文) France ,Provence University d'Aix-Marseille
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1 SHIGEMI Sinya, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Arnaud Brotons, Aix Marseille University, Professor 3-8

#### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (フランス)		備考
		A.	B.	
日本	A.	2/ 10		
	B.	4		
(フランス)	A.	1/ 3		
	B.	4		
合計 〈人／人日〉	A.	3/ 13		
	B.	8		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人／人日は、2 / 14 (= 2 人を 7 日間ずつ計 14 日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>コレージュ・ド・フランスを中心とする共同研究をフランスとの学術拠点形成事業として多元・複合的に発展させるため、名大人文学研究科と学術交流協定を締結しているエクス・マルセイユ大学と日本および中世を対象とした宗教文学テキストを媒介とする世界像の形成過程を探り、その過程の所産としての特筆すべき文化遺産をめぐって、歴史・文学・宗教・美術学の諸分野の研究者が、各自の専門分野・領域の対象を通じて研究成果を披露し、その文化的意義について自由に討議を行う。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>中世／世界観という広い対象と巨視的な課題設定により、仏（エクス・マルセイユ）と日本（名大人文学研究科）側の中世および日本の専門研究者による各自の専門分野の高度な研究達成の成果（例：代表者による『中世日本の世界像（2018年）』など）を共通の土台の上に乗せて相互の分野研究や地域相互の研究上の理解を進展させ、宗教文化の人文遺産化の基盤を築くことが期待される。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>エクス・プロバンス大学側の受入教員であるアルノー・プロトンス教授を中心に、同大の日本研究者とエクス・プロバンス側が招聘するフランス国内の日本および西欧の中世研究者と日本側の代表者である阿部をはじめ名大人文学研究者を中心にゲストスピーカー1名を含む7名がエクス・プロバンス大学を訪問し、11月末の二日間の研究集会をエクス・プロバンスにおいて開催する。翌日はエクスカーションとして、プロバンスのシトー派修道院など、当地域の宗教文化遺産およびアーカイヴスを探訪・見学する。またこれらの成果としての報告書（日本・仏両国語による）を作成する。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：日本側参加者の旅費（渡航費、宿泊費）、その他必要とされる諸経費</p>
	<p>フランス側</p>	<p>内容：研究集会会場提供、会議費、エクスカーションの必要経費</p>

整理番号	S-7
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 第二回 南山大学宗教文化セミナー
	(英文) JSPS Core-to-Core Program Nanzan Seminar for the Study of Religion and Culture 2
開催期間	平成 31 年 1 月 7 日 ~ 平成 31 年 1 月 9 日 (3 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、名古屋、南山大学
	(英文) Japan, Nagoya, Nanzan University
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授
	(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)		備考
		A.	B.	
日本	A.	6 / 18		
	B.	5		
(日本)	A.	5 / 20		
	B.	0		
合計 <人/人日>	A.	11 / 38		
	B.	5		

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2 / 14 (= 2人を7日間ずつ計14日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>平成 30 年 1 月に、本拠点形成事業により開催した第二回宗教文化セミナーに引き続き、南山大学宗教文化研究所において、名大 CHT と共催により、海外（欧米）大学において日本宗教を研究する大学院生（留学生）や若手研究者を公募により選出する。その研究成果を日本語で報告し、招へいされた日本宗教研究者をディスカッサントとして討議を行い、研究上の交流をはかり、博士論文作成および日本の学会界での発表等の進捗を助ける。また、日本宗教に関する資料や文化遺産の見学などエクスカージョンを行い、相互の親睦をはかる。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>参加した大学院生や若手研究者の各自の日本宗教に関する研究上の知見や研究方法・視点に関して、日本における専門の第一線・中堅研究者からの意見・助言を得て、一定の州水準を求めつつ自由に報告を行う。この討議により相互に刺激を得て、自己の研究上の進展に資すると共に、宗教文化遺産の意義と価値を共有し、将来の日本宗教のネットワーク形成の一端を担う。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>南山大学宗教文化研究所が企画運営を担当し、年度のテーマ（課題）の提案から公募・報告者選抜連絡とセミナーの運営までを行う。名大 CHT は報告者、ディスカッサントの謝金および共同開催（エクスカージョン等の企画運営を行う）としてその実施を支援する。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側・名古屋大学</p>	<p>内容：日本側参加報告者（海外より渡航を含む）の旅費（期間中の宿泊費等）、会議費、エクスカージョン必要経費</p>
	<p>日本側・南山大学</p>	<p>内容：セミナー開催経費、通信費</p>

整理番号	S-8
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 コロンビア大学・名大 国際研究集会「境界越境と芸能」 (英文) JSPS Core-to-Core Program International Research Symposium, Columbia University: “Performing Arts: Establishing and Crossing Boundaries”
開催期間	平成 31 年 3 月 15 日 ~ 平成 31 年 3 月 17 日 (3 日間)
開催地(国名、都市名、 会場名)	(和文) アメリカ、ニューヨーク、コロンビア大学 (英文) USA, NY, Columbia University
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研 究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研 究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Haruo SHIRANE, Columbia University, Professor 2-1

#### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (アメリカ)		備考
		A.	B.	
日本	A.	9/	54	
	B.	1		
(アメリカ)	A.	4/	12	
	B.	6		
(ドイツ)	A.	1/	4	
	B.	0		
合計 〈人／人日〉	A.	14/	70	
	B.	7		

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※人／人日は、2／14(=2人を7日間ずつ計14日間派遣する)のように記載してください。

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場



合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>拠点形成事業におけるコロンビア大学との共同研究の中間成果を提示するためのシンポジウムとして、共同研究に参加する双方のメンバーおよびゲスト研究者を招へいする。共同研究の主要課題である日本文化における境界の文化論を、今回は「越境」という動態運動<small>ムーブメント</small>において焦点化し、事前に報告を論文化したうえで、全参加者が報告内容を共有し報告を経て特に芸能<small>パフォーマンス</small>という座標<small>フィールド</small>（領野）においてディスカッサントを交えて討議を行い、さらには後半の各共同研究相互とのクロスオーバーを期すための基盤を構築する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>今回の成果論文を国際学术界で評価されるための学術上最先端水準において公刊するための編集チームを立ち上げる。コロンビア大学側は、ハルオ・シラネ、マイケル・コモ、ベルナルド・フォル、M.モアーマン、その他の米国側研究協力者がディスカッサントとして参加する。名大側は、代表者（阿部）、近本及び研究協力者5～6名及び若手ワークショップとして大学院生によるセミナーも開催する。この日程に連続してグローバル展開プログラムの為の国際ワークショップをワシントン・フリーアギャラリーにて開催する。絵巻所蔵品を中心に、研究会と調査を行いその成果を報告する。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>コロンビア大学東アジア学部（文学、宗教）と名大 CHT（阿部、近本）が共同開催し、それぞれの行う共同研究の中間的成果を本セミナー（基調講演、シンポジウムを含む国際研究集会形式）において披露する。集会は会場のコロンビア大学側で運営し、日本側がこれに参加する形態をとる。また名大では平成30年度内にハルオ・シラネ、マイケル・コモ教授参加の許に小規模な研究会や研究打ち合せ、実地調査等を、それぞれの日常的な研究活動として行う。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：日本側参加者の旅費（渡航費、宿泊費等）、集会用資料作成費、翻訳者謝金</p>
	<p>米国側</p>	<p>内容：セミナー運営、会議費、米国側ディスカッサント等の招へい費用、編集委員会の開催コーディネート</p>

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外の交流（日本国内の交流を含む）計画を記入してください。

※1名につき1行で記入してください。

該当無し

8-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当無し

## 9. 平成30年度研究交流計画総人数・人日数

### 9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人／人日〉	アメリカ 〈人／人日〉	フランス 〈人／人日〉	ドイツ 〈人／人日〉	合計 〈人／人日〉
日本 〈人／人日〉		17 / 102 ( 2 / 12 )	4 / 18 ( 7 / 32 )	6 / 42 ( / )	27 / 162 ( 9 / 44 )
アメリカ 〈人／人日〉	2 / 10 ( / )		/ ( / )	/ ( / )	2 / 10 ( 0 / 0 )
フランス 〈人／人日〉	1 / 5 ( / )	/ ( / )		/ ( / )	1 / 5 ( 0 / 0 )
ドイツ 〈人／人日〉	/ ( / )	/ ( / )	/ ( / )		0 / 0 ( 0 / 0 )
合計 〈人／人日〉	3 / 15 ( 0 / 0 )	17 / 102 ( 2 / 12 )	4 / 18 ( 7 / 32 )	6 / 42 ( 0 / 0 )	24 / 135 ( 9 / 44 )

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

※相手国以外の国へ派遣する場合、国名に続けて(第三国)と記入してください。

### 9-2 国内での交流計画

	交流予定人数 〈人／人日〉
合計	30 / 95 ( 9 / 27 )

10. 平成30年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	700,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	10,300,000	
	謝金	350,000	
	備品・消耗品購入費	0	
	その他の経費	600,000	
	不課税取引・非課税取引に係る消費税	800,000	
	計	12,750,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		1,275,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合計		14,025,000	